

語彙指導における問題点と改善

Some Problems of Vocabulary Teaching and Ways to Improve

梅田 礼子*

Reiko Umeda

Summary

Vocabulary is one of the basic knowledge of a language. Some students, however, haven't acquired some strategies to learn vocabulary. Thus, teachers should guide those students by showing some strategies of learning vocabulary, especially, memorizing. Teachers need not to be "supermotivators," but "good enough motivators" to motivate students, with trying four areas of Motivational Strategies suggested by Dörnyei (2001). This paper views some problems and difficulties the author has in vocabulary teaching in her class, and discusses what to improve in the teaching methodology.

キーワード：語彙指導、語彙学習、動機、十分な動機づけ者、自律的学習者

Keywords：vocabulary teaching, vocabulary learning, motivation, good enough motivator, autonomous learner

1. はじめに

英語学習において、基本的な文法の習得と、語彙の習得は重要である。しかし、文法規則がある程度の数に限られ、比較的短期で学習することが可能なのに対し、語彙の学習は多大な労力と時間を要する。英語の母語話者の大学卒業生の語彙数がおよそ 2 万語と言われており¹⁾、第二言語として学習する場合にそこまでの語彙数を要しないとしても、5 歳の母語話者が持っているとされている語彙数 4,000 から 5,000²⁾を習得できれば、一般的な読書や情報収集にかなり役立つと考えられる。語彙学習は自習に依るところが大きく、指導が難しい。

大同大学では 24 年カリキュラムより、英語が必修となっている 1・2 年生に対し、語彙指導を行っている。本稿では特に 2 年生に対する語彙指導について振り返り、問題点と改善しうる点を明らかにしたい。

2. 語彙指導の現状

24 年開始のカリキュラムから始まった語彙指導につ

いて、1 年生と 2 年生とでシステムが異なるので、まず現状を説明する。

2.1 語彙指導—1 年生の場合

大同大学では 24 年カリキュラムより 1・2 年生に語彙指導を導入した。(カリキュラム学年進行で、2 年生には 25 年度より導入。) 1 年生ではまず基本的語彙、しかもまずは「認識語彙」の数を増やすことを目標としており、半期に 3 回の小テストも、単語と和訳の一对一对応を答えられれば正解、という形式である。10 個の英単語に対して、10 個の選択肢から適切な和訳を選ぶ、それが 2 セット合計 20 個の問題。テキストは、中学・高校で学ぶ語彙 3000 語に絞ったもので、そのうちの、高校基本語彙計約 570 語について 1 年間、2 つの授業で並行して学習するというペースである。半期に 3 回の小テストの、各回の試験範囲としては 36~42 語程度で、そこから 20 問の出題である。分量の適切さと、単語と和訳の対応を選択肢から答えるという形式であるためか、およそ 8 割以上得点する学生がほとんどという好成績である。ただし、もちろん、語彙指導/学習の目標もテスト形式も、「認識語彙」の増強であり、こ

* 大同大学教養部外国語教室

の小テストの点が良いからと言って、必ずしもその語彙を文の中で自由に使えるとは限らない点は注意が必要である。1年生の語彙指導はこのような目標・指導形式・テスト形式なので、本稿の考察からははずす。

2.2 語彙指導—2年生の場合

2年生で筆者が担当しているのは総合・キャリアコースというコースで、メインテキストはTOEIC対策的な大学テキスト、語彙はTOEIC対策を謳った単語・熟語集である。語学教育教材開発研究会編「Word Builder 基礎から学ぶTOEICテスト英単熟語」(南雲堂)という単語熟語集で、基本編は中学の教科書から約280語、高校の教科書から約970語、大学受験レベルの英語約480語、となっている。授業ではここは扱わず、後半のTOEIC対策の章、「TOEIC試験で500点台を獲得するために役立つと思える単語546語」と熟語を分野ごとにまとめた章を指導する。この章を授業回数で割り、毎回の授業で25~32個程度の単語を扱うことになる。授業ではTOEIC対策のメインテキストと、就職活動に役立つだろうということで、一般常識・時事用語英文も指導することになっていて、3本立てで、語彙指導には約5~15分しか使えないという状況である。メインテキストについての説明を少し詳しくしていると、残り2種にかけることのできる時間が減り、語彙指導はたいして10分ほどしかない。そのため、少し応用的、あるいは使用頻度がさほど高くないと思われる語彙を筆者の判断で削るなど工夫はするが、毎回25~28個程度の単語を扱うことになり、ほぼ、発音、意味、必要なら語源の説明などをして、例文を読み上げるのみで時間が終わってしまう。書く練習や覚える作業は学生各自の自習に任せることとなる。このような状況での学習状況や小テスト点数について点検する。

2.2.1 小テスト結果

所属する外国語教室の指示で、単語テストを半期に3回、15点分行って成績評価に組み入れることになっている。試験の詳細は指定されていないが、約5回分の授業での学習範囲、約125個の単語熟語から5題の出題とした。3問は例文の中でターゲット語を空欄にしておき、4つの選択肢から正しい語句を選ぶ、2問は例文の中でターゲット語を空欄にしておき、記述させるという形式である。下記の例のように、選択肢の、不正解となる単語もその回の学習範囲の語とし、消去法も用いることが出来るようにした。例文は語彙学習本の例文のままである。

(1) 単語テスト出題形式例

記号選択式

「一人の採用枠に500人以上の応募者があった」

We had over 500 () for one position.

あ。applicants い。receptionists う。careers え。supervisors

記述式

「彼女は職を解雇された」

She was (f) from her job.

26年度前期の小テスト3回(計15点)の結果は以下のものであった。

表1. 26年度前期単語小テスト結果

	3限(工学部 建築学科)	4限(情報学部)
平均点	5.3	8.6
3回合計最高点	11	12
3回合計最低点	1	2
5点以下	18人(60%)	17人(48.6%)

このように、平均点が工学部のクラスでは半分以下、5点以下、つまり3分の1の得点率の学生が60%を占めるという残念な結果であった。点数の良い方の情報学部クラスでも、5点以下が50%近く、決して芳しい結果ではない。半期ごとに行う授業評価アンケートで、自由記述欄に「単語テストが難しい。試験範囲を狭くしてほしい」という意見が2通ほどあった。確かに約125個の範囲から5題の出題なので、試験に対して試験範囲が広い。単語テストは覚えさせるための手段ではなく、評価のために半期に15点分を行うようになっているのだが、1回の試験範囲の対象語彙数が多過ぎ、学生の学習動機づけとして弱くなるか、一部の学生は習得を諦めてしまうようだ。

2.2.2 学習時間とテスト結果

前節の単語小テストの結果と、学生の自習時間とを比較検討してみよう。

本学では半期ごとに「授業評価アンケート」と、学生が自分の学習を振り返る、「学習到達度評価アンケート」を行っている。後者の質問項目の一つに自習時間を尋ねるものがある。質問は「あなたはこの科目について、平均すると毎週どれくらい授業に関連した学習(予習や復習、レポート作成、情報の検索や関連図書の購読[講読か?])などを行いましたか」というもので、選択肢が、「30分以内、1時間程度、2時間程度、3時間程度、4時間程度」の5つである。26年度前期のこの項目の結果は以下の通りである。

表2. 授業外学習時間

	30分以内	1時間	2時間	3時間	4時間
3限	14人	8人	5人	0人	1人
4限	50%	28.6%	17.9%	0%	3.6%
4	18人	10人	4人	0人	2人

限	52.9%	29.4%	11.8%	0%	5.9%
---	-------	-------	-------	----	------

(回答数：3 限工学部建築学科 28 人、4 限情報学部 34 人)

一つ目の選択肢「30 分以内」には「0 分」も含まれてしまっており、「まったく学習していない」のか「少しは学習した」のか、の区別がつかないのが残念である。教師にとっては残念ながら、2 クラスとも、最悪の場合には半数の学生が「まったく学習していない」か、あるいは「30 分以内の学習をした」ということである。

2 クラスの結果を合計し、単語テスト 3 回計 15 点分の得点幅 1~12 点の上と下での学習時間を比較してみる。

表 3. 12 点~7 点の学習者の学習時間

(対象者 22 人、学習時間未回答者 1 名)

時間	30 分以内	1 時間	2 時間	3 時間	4 時間
人数	11	7	2	0	1

表 4. 5 点~1 点の学習者の学習時間

(対象者 35 人、学習時間未回答者 1 名)

時間	30 分以内	1 時間	2 時間	3 時間	4 時間
人数	17	8	7	0	2

表 3 と表 4 を比較すると、学習時間について人数的に似た分布を示しており、単純に学習時間が長い学生が単語テストの得点が高い、とは言えない事が分かる。

表 3 の得点 12 点~7 点の層の中で、さらに 10 点以上は 7 名で、学習時間 30 分以内が 2 名、1 時間が 4 名、2 時間が 1 名、12 点の学生、11.5 点の学生は 30 分以内、と回答している。得点上位層が学習時間が大変長い、というわけでもない。得点上位層は自己の学習時間を控えめに報告する傾向があるのか、もし事実通りとすると、対象単語の中に高校までの学習で身につけていた語が多い、暗記が得意で、さほど時間をかけずに覚えることが出来る、などの要因が考えられる。

一方、単語テスト点数が 5 点~1 点の層では、学習時間が 2 時間と答えた学生が 7 名、4 時間と答えた学生が 2 名居るが、数名は実際より多い時間を回答した可能性がある。この授業では、シラバス作成者である教員の発案で、単語練習カードを毎授業で配布し、宿題として提出させている。単語の発音（発音記号でもカタカナでもどちらでもよい）、意味、単語練習を 2 回書くという作業シートで、半期に計 14 枚提出出来る。提出は任意となっているが、ほとんどの学生が提出している。学習時間が 4 時間と回答したうちの 1 名はこのカードの提出が 12 枚、2 時間と回答した 7 名のうち、3 名はカードの提出が 9 枚、5 枚、0 枚であった。これらの学生は学習時間を過剰申告した可能性がある。もし、申

告した学習時間が事実だとすると、「学習時間はかけているが暗記できていない」ということになる。暗記の仕方を知らないか、覚えたと思っているが確認・練習が少ない、など、学習の効率が悪い可能性がある。

3. 語彙学習の問題点と改善

2 章で見たように、現在筆者が担当している、2 年総合・キャリアコースでの語彙指導については、多くの学生の学習動機が低く、学習時間が短い、対象学生の現在の力に対し学習単語がやや難しい、学習すべき量がやや多い、一部の学生は学習、特に暗記の仕方が分からず効率の悪い学習をしていると思われる、などの問題があるようだ。これらについて、改善方法を検討する。

3.1 学習動機づけ

Dörnyei (2001) は教師に“Supermotivator”ではなく、“good enough motivator”になること、指導の方策は量ではなく質が重要であることを説き、巻末に動機付けの段階別ストラテジーを挙げている³⁾。これらすべてをやるということではなく、すでに行っていることを確認し、まだ行っていないことのうち、自分のクラスで利用できそうな項目を取り入れてみる、という形を提案している。一覧には 4 つのエリア、Creating the basic motivational conditions, Creating initial motivation, Maintaining and protecting motivation, Encouraging positive self-evaluation が提示され、それぞれに小項目が提案されている。このうち、Creating the basic motivational conditions は、学習者との良好な関係を築く、学習者の学習を真剣に考えるといった基本事項であり、これは割愛し、他の 3 つのエリアについて、筆者が担当しているコースでの語彙指導について考えてみる。

3.1.1 Creating initial motivation

このエリアには 9 番から 16 番までの少項目がある。授業の改善に特に関連しそうなのは、次の 13~15 の項目である。

(2) 13. Increase the students' expectancy of success in particular tasks and in learning in general --- Make sure they know exactly what success in the task involves.

14. Increase your students' goal-orientedness by formulating explicit class goals accepted by them

15. Make the curriculum and the teaching materials relevant to the students. (Dörnyei (2001) p.140)

現在のカリキュラムではこのコースは 2 年コミュニケーション英語 3・4 (前期・後期) に 3 種設定されているコースのうち、特に TOEIC など外部試験に対応できる実力を養成するコースとして設定されている。メイ

ンテキストも単語熟語学習本も TOEIC 対策を銘打ったものである。しかし実際には、コース選択時にあまり説明を読まずに希望登録してしまう学生が居るようで、授業が始まってから、思っていた内容と違う、と不平を言うケースがある。このような学生に、例えば「この単語集の単語を習得すれば TOEIC で 20 点～50 点の得点アップが期待できる」というように「成功」の姿を語っても、学習動機づけとはならない。学習動機づけ以前に、システムとしてふさわしいコースを選択するよう徹底した指示が必要である。また、進んで選択した学生に対しても、試験対策だけの授業とならないよう、日常経験に関連付けるなどの工夫をなるべくすべきだろう。

3.1.2 Maintaining and protecting motivation

このエリアではタスクについての次の 2 つがまず実行しやすいだろう。

(3) 17. Make learning more stimulating and enjoyable by breaking the monotony of classroom events.

19. Make learning more stimulating and enjoyable for the learners by enlisting them as active task participants.

(Dörnyei (2001) p.140)

現在この授業での語彙指導は、メインテキスト、一般常識時事用語英文にかける時間を引いた、10～15 分程度で行っているの、単語学習本の発音、回ごとに一つの発音記号と発音を取り上げて解説、意味、必要なら語形成や語源について解説するのみで終わっている。1 年の授業で時々入れている、単語カードなどを使った活動を入れて、学生の興味を喚起すべきかもしれない。(TOEIC 等外部試験で高得点を目指す学生が履修しているという前提に立ち、楽しい活動は入れておらず、解説中心の講義となっている。) 語彙学習の楽しい活動については梅田 (2012) に、これまでに行ってきた、単語カード学習や単語カード神経衰弱ゲームなどを報告した⁴⁾。また、Thornbury (2002)にも、各自が書いた単語カードをペアで質問しあって単語を当てる、母音を抜いて単語を書いて当てさせる、グループで単語カードをカテゴリー別に分ける、など単語カードの様々な活用法などが紹介されている⁵⁾。

また、このエリアには活動とテストに関わる項目もある。

(4) 23. Provide learners with regular experiences of success.

a. Provide multiple opportunities for success in the language class.

b. Adjust the difficulty level of tasks to the students' abilities and counterbalance demanding tasks with manageable ones.

c. Design tests that focus on what learners can rather than cannot do, and also include improvement options.

(Dörnyei (2001) p.142) (a.,b.,c.の記号は筆者による。以下同様。)

b. に当たる課題と思われるのが、25 年・26 年と継続して行っている、「単語練習カード」である。前述のように、発音、意味を書き、単語を二回書く練習をするというシンプルな作業で、これは取り組みやすいためか、9 割以上の学生が取り組んでいる。ただし、授業前に配布しているため、メインテキストの学習中に単語カードに記入していて、メインテキストの学習がおろそかになっている学生が一部にある。これを防止するため後期中より、授業後に配布し、次週までの課題とするよう変更した。メインテキストに関しては学習意欲をあまり見せない学生も、この単語練習カードに取り組むのは、課題が明瞭、簡潔であり、提出すれば加点されるというプラスもあるためだろう。当初の与え方は良くなかったが、明瞭、簡潔な課題であれば、英語が苦手・嫌いな学生もある程度取り組むということは分かった。今後の課題設定のヒントとなりそうである。a. と c. に関しては、前期に行っていた、半期に 3 回の小テストで、2.2.1 で見たような結果では、大半の学生にとっては、成功体験ではなく、失敗体験を重ねたことになってしまっている。学習時間の少なさに見られるように、学生の努力不足もあるが、課題が困難(単語のレベルが高い、対象単語数が多い)であることも、小テスト得点が低い一因であるようだ。後期は前期アンケートにあった要望も受け、単語テストを半期に 3 回から毎回に変更することとした。(総合点数は 15 点で同じ。) 現在 2 回行ったところで、毎回 3 問の平均点が 1.1 点、2.1 点、と、半期に 3 回方式よりは得点が高くなっている。

さらに、このエリアには次のような重要項目がある。

(5) 26. Build your learners' confidence in their learning abilities by teaching them various learner strategies.

a. Teach students learning strategies to facilitate the intake of new material.

b. Teach students communication strategies to help them overcome communication difficulties.

(Dörnyei (2001) p.142)

この a. に関し、現在の授業での指導は解説をするのみで、後は単語練習カードに書くなどして各自で暗記するように、となっている。しかし、2.2.2 で見たように、一部の学生は(学習時間申告が事実だとすれば)学習には時間をある程度割いているが、結果が伴っていない、つまり、効率の悪い学習をしているようだ。いわゆる、「なんとなくわかった」「覚えたつもり」で、テ

ストされると、しっかりと理解していない、暗記できていない、ということだろう。大学までの学習期間に自分に適した暗記方法などを見つけている学生は良いが、そうでない学生も居るようだ。そこで、指導としては「暗記しなさい」ではなく、暗記できるような課題を与えることが必要となる。単語練習カードもその一つなのだが、作業として書いて出すだけで、暗記に勤めていない学生も居るようで、提出回数と小テスト点数が今一つ結びついていない。学習のストラテジーを紹介、指導してやるのが教師の役割となる。この点については次節で述べる。

3.1.3 Encouraging positive self-evaluation

このエリアにはカリキュラムやコース、授業の設定、評価方法などに関わる項目が多い。

(6) 31. Promote effort attributions in your students.

a. Encourage learners to explain their failures by the lack of effort and appropriate strategies applied rather than by their insufficient ability.

b. Refuse to accept ability attributions and emphasise that the curriculum is within the learners' ability range.

(Dörnyei (2001) p.143)

英語に苦手意識を持つ学生のほとんどが、「自分は出来ない」「どうせ俺は出来ない」といった表現をよく口にする。暗記部分はある程度努力とかけた時間に比例する、と時々激励するが、自分の能力の限界、と思いつ込んでいる学生は多い。初期段階で、小テストや課題に簡単なものも混ぜ、成功体験をさせることも大切であろう。

また、学生の活動をモニターし、評価することも動機づけの一つとなる。

(7) 32. Provide students with positive information feedback.

a. Notice and react to any positive contributions from your students.

b. Provide regular feedback about the progress your students are making and about the areas which they should particularly concentrate on.

33. Increase learner satisfaction.

a. Monitor student accomplishments and progress, and take time to celebrate any victory.

b. Make student progress tangible by encouraging the production of visual records and arranging regular events.

(Dörnyei (2001) pp.143-144)

現在の筆者の授業では小テストの点数に応じて、ポジティブな評価コメントのハンコを押すことくらいしかフィードバックが出来ていない。学生の成長記録も、メインテキストについての毎回の復習小テスト、単語

テスト、単語練習カードの点数や提出状況を記録できる用紙を配布しているが、各自の記録用に使用して下さい、と配布しているのみで、全員が活用しているとは限らない。また、点数や提出を一覧表に記録するだけなので、成果が目に見えて、達成感につながるというところまでは行きにくい。筆者も試している脳トレーニング「Lumosity」^{注1)}の成長記録では、取り組んだ回数、ゲームごとの取り組み回数、スコア、が自動的にグラフ化され、自分の各分野での成長記録が分かる。また、同世代の中での自分の位置を確認することもでき、励みになる。英語学習の中でも、読解に比べて語彙の学習はこのようなデータ化がしやすい分野であるので、こうしたグラフシステムを作れると、学生の学習の動機づけとなってよいと思うのだが、そのような高度なシステムを開発する力はなく、残念である。ただ、点数・提出記録表を工夫して、例えばマラソンで進んだ距離のようにコマを塗りつぶして行く形式にする、など、手軽にできる工夫もあり、今後改善したい。(過去に多読指導を行ったときにはこのような達成記録用紙を用意した。が、読んだ本の記録や感想用紙とは別に、その達成記録用紙に記入するのが面倒なのか、利用する学生は少なかった。)

さらに、評価の仕方に関わる項目もあり、これは今後カリキュラムやシラバスの検討の際に考慮したいものである。

(8) 35. Use grades in a motivating manner, reducing as much as possible their demotivating impact.

a. (割愛)

b. Make sure that grades also reflect effort and improvement and not just objective levels of achievement.

c. Apply continuous assessment that also relies on measurement tools other than pencil-and-paper tests.

(Dörnyei (2001) p.144)

現在のカリキュラム・シラバスでの、この総合・キャリアコースでは、単語練習カードが「努力」を評価する部分となっている。100点のうち、試験が60点、残り40点中の14点がこのカード提出点となっている。これはただ「書く」作業であり、自己の英語能力の評価が低い学生でも気楽に取り組むことのできる課題である。しかし、TOEIC対策総合のメインテキストについての試験や小テストとの総合評価なので、この作業をしたことが即合格に結びつくわけではない。努力も評価されるシステムの方が動機づけになることは分かるが、しかし一方で、就職活動や社会で働く前の「出口保証」という要請も大きく、語彙、文法、読解力等の基礎を固める必要がある中で、客観的達成度と努力点部分のバランスをどのように取るべきか、難し

い問題であり、今後検討を要する。

3.1.4 学習ストラテジーの紹介

英語学習の中でも、特に語彙増強は「暗記」に負うところが大きい。しかし、授業において教師が学生に対してできることは語彙の紹介や説明、様々な活動を通してなじませること、であり、最終的に語彙を暗記するのは学生個人の仕事となる。そこで、どのように学習者を訓練するか、が大切となる。学習法、特に、暗記方法を学生に紹介することも必要である。

Thornbury (2002)は、上手な学習者が行っていることとして、以下の点を挙げている。

(9)・They pay attention to form (the constituents of words, their spelling, their pronunciation and the way they are stressed)

- They pay attention to meaning
 - They are good guessers—which means they work out the meanings of unfamiliar words from their form and from contextual clues.
 - They take risks and are not afraid of making mistakes
 - They know how to organize their own learning—by, for example, keeping a systematic record of new words, using dictionaries and other study aids resourcefully, using memorizing techniques, and putting time aside for the ‘spade work’ in language learning, such as repetitive practice.
- Thornbury (2002), PP.144-145

そして、この最後の点が「よい学習者は自律的手段を獲得しており、独自の技法を発展させてきた」ことを示している、としている。

(10) This last point suggests that good language learners have achieved a measure of autonomy and have developed their own techniques—that they don’t need to be trained how to learn.

Thornbury (2002), P.145

学生が自律的な学習者となること、その手助けをすることが教師の役割である。特に、語彙学習のように、個人の暗記作業が大きな部分を占める場合は特にそうである。そして、まだ自律的学習者となれていない学生に対しては「ガイダンスが必要で、様々な語彙学習の技術を示してやることが大切」と Thornbury (2002) は指摘している。

(11) Nevertheless, less self-directed learners might benefit from guidance—by, for example, being shown a range of vocabulary learning techniques, and choosing those which best suit their preferred learning style. Particularly useful are techniques for remembering words, since, as we saw in Chapter2, a great deal of what is involved in acquiring a functioning lexicons simply a

memory task.

Thornbury (2002), P.145

そして、暗記、言葉がどのようにして覚えられるのかについて、2章で詳しく述べている。Long-term memory はファイリングシステムのようなもので膨大な容量を持つ。しかし、レッスンで習った語も翌週には忘れていくこともあるように、すぐに決して忘れないようになるわけではない。そして、“Rather, it occupies a continuum from ‘the quickly forgotten’ to ‘the never forgotten’.” (Thornbury (2002), P.24)と述べ、言葉の暗記に関係のある点を紹介している。それらは、項目だけを挙げると以下の通りである。

(12) Repetition, Retrieval, Spacing, Pacing, Use, Cognitive depth, Personal organizing, Imaging, Mnemonics (tricks to help retrieve items or rules, e.g. ‘i before e except after c’.), Motivation, Attention/arousal, Affective depth
Thornbury (2002), pp.24-26

この中で、筆者の現在の授業での語彙指導に欠けていて、改善しうるのは、Repetition, Retrieval, Spacing, Use である。現在の授業では時間の制限があり、語について発音、意味、語源、用法などを説明し、例文を読み上げるのみになっていて、暗記する作業や繰り返し思い出す作業は学生各自に任せる形になっている。しかし、小テスト結果に表れているように、暗記の苦手な学生は時間をかけても long-term memory に入っていない。ここで大切なのは、暗記にまつわる、(12)のような様々な点を示してやることである。また、「暗記しなさい」「繰り返して練習しなさい」という指示では不足な学生も居るので、実際に授業でその作業を行い、暗記の仕方を示す必要があると思われる。「繰り返し」は、一つの授業時間内だけでなく、複数の授業回にわたって、教材の中で、たびたびその語に触れることも大切である。Thornbury (2002) は Repetition の説明で次のように述べている。

(13) The time-honoured way of ‘memorising’ new material is through repeated rehearsal of the material while it is still in working memory – i.e. letting the articulatory loop just run and run. However, simply repeating an item (the basis of rote learning) seems to have little long-term effect unless some attempt is made to organize the material at the same time (see below). But one kind of repetition that is important is repetition of encounters with a word. It has been estimated that, when reading, words stand a good chance of being remembered if they have been met at least seven times over spaced intervals.

Thornbury (2002), P.24

このような指摘を参考にし、1つの授業の中で繰り返し説明をしたり、課題を与えたりする、また、複数の授業にわたって同じ語について取り上げ、触れる機会をつくり、長期記憶にその語が入るよう工夫する、などが必要である。

以上、Dörnyei (2001)が示した動機づけの4つのエリアのうち、3つについて、筆者の授業に即して問題点と改善しうる点を見てきた。学生に語彙学習のストラテジー、特に、繰り返し、繰り返し記憶から引き出す訓練をする、など暗記の方法を提示するなどして、教師が good enough motivator となり、学生が autonomous good learner となることが出来るよう指導してゆきたいものである。

4. まとめと今後の課題

本稿では筆者が2年生対象の授業内で行っている語彙指導について、現状を点検して問題点を明らかにし、その改善策を検討した。

現状での、語の解説のみの指導では、一部の学生には不十分で、特に、暗記の仕方を身につけていない学生にはその仕方を提示する、など工夫が必要である。

学習ストラテジーを提示し、学生一人一人が自分に適した学習ストラテジーを身につけ、自律的な学習者となり、継続して語彙学習を行うことが望まれる。

学習ストラテジーについては、語彙学習に限らず、文法や読解、リスニング、スピーキングなど、他の技能を鍛える際にも重要であろう。

なお、暗記、繰り返し学習の仕方にも、書いて覚える、何度も発音して覚える、など様々な方法がある。ある学生に役立つ方法が、他の学生にも役立つとは限らない。Gardner (2006 (1993))の提唱した Multiple Intelligences という考えによると、人の知能は Musical, Kinesthetic, Logical-Mathematical, Linguistic, Spatial, Interpersonal, Intrapersonal など、様々な側面で構成されている⁶⁾。こうした考えも参考に多様な暗記法を授業で提示することも今後の課題となる。

また、「語についての知識」には、形式面、内容面それぞれに多様な側面がある。Thornbury (2002, p16)では spoken form, written form, meaning(s), grammatical behavior, word's derivations, collocations of the word, register of the word, connotations of the word, word's frequency を挙げている。こうした、語の多様な知識について、何をどのくらい、どの段階で学生に与えて行くのか、初期段階では形式と意味に限定して与えるの

がよいのか、あるいはその他の知識も必要に応じて同時に導入する方がよいのか、など、重要かつ興味深い問題であり、今後の検討課題とする。

注

1) Lumosity 最高経営責任者兼共同設立者 Kunal Sarkar, 最高科学責任者兼共同設立者 Michael Scanlon, 最高技術責任者兼共同設立者 Dave Drescher らが開発した、オンラインでの脳トレーニング。計算、語彙、などいくつかの分野に分かれたゲームが数種類ずつ用意されており、学習者は楽しみながらトレーニングに取り組むことができる。有料会員になると、トレーニング記録や、世代ごとの自分の成績順位を知ることが出来る。

参考文献

- 1) Nation, I.S.P. 1990, Teaching and Learning Vocabulary, Heinle&Heinle, p.11.
- 2) Schmitt, Norbert. 2000, Vocabulary in Language Teaching, Cambridge University Press, p.3
- 3) Dörnyei, Zoltán. 2001, Motivational Strategies in the Language Classroom, Cambridge University Press.
- 4) 梅田礼子. 2012、シリアスゲームと教育、大同大学紀要第48巻、pp.1-8
- 5) Thornbury, Scott. 2002, How to teach vocabulary, Pearson Education.
- 6) Gardner, Howard. 2006(1993), Multiple Intelligences, Basic Books.